

チェルノブイリ通信

発行 チェルノブイリ支援運動・九州事務局
連絡先 北九州市八幡東区春の町1-3-7 日開荘2号
Tel・Fax 093(681)1780

口座番号 福岡7-65328
加入者名 チェルノブイリ支援運動・九州

1995年4月21日

No.

29号



わたしたちを助けてください！

チェルノブイリ通信No. 29号を お届けします

暖かくなりましたね。みなさん、いかがお過ごしですか？チェルノブイリ支援運動・九州事務局は、花見酒に酔う暇もなく、ひたすらチェルノブイリの子どもたちの作文集「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」の編集に明け暮れていました。そのかいあって、すばらしいものができました。今回はその事が中心になるのですが、その前に大切なサナトリウムの運営基金の変更についてお知らせします。

今回の内容

- 運営基金の新規の開始と基金の金額変更について
- 作文集について
 - ・内容の紹介
 - ・販売方法と販売のお願い
- 作文に寄せられた感想の紹介
- 子どもたちの来目について
- 作文集の原画展を開催について
- 新しい事務局紹介
- その他

…となっています。



運営基金の新規が始まります

サナトリウム運営基金は、
一口10000円に

総会の報告でもお知らせしたように、本年度からサナトリウム運営基金の金額が変わります。より多くの方々により支払いやすい額で協力していただくためです。

旧 3500円×12ヵ月=42000円



新 一口 10000円

これは、一人の子どもが1クール（3週間）サナトリウムで療養できる金額です。金額を低くすると、多くの人に協力していただける可能性がある反面、カンパの総額が減る可能性もできます。ベラルーシの経済事情が非常に苦しくなっています。（ヤコベンコさんからの報告参照）いままで以上の金額をサナトリウムに届けたいと思っています。何とかよろしく願います。

分割支払い、グループ単位での申し込みも結構です。

なお、チェルノブイリ医療基金につ

きましては、今まで通り一口2千円で
す。こちらもよろしく願います。

☆いつでもカンパをしていただくことが
できるよう、今回から通信発行の際は
毎回振り替え用紙を同封いたしますの
でご了承ください。また、領収証につ
きましては、1万円以下の場合、振込
みの際の領収用紙に代えさせていただ
いていますが、もし領収書が必要な場
合は、その旨を振込み用紙にお書きく
ださい。送らせていただきます。

ワシーリ・ヤコベンコさんより
サナトリウム・九州の報告

10月には15人の子どもたちを受け

入れました。11月には食料を運ぶため
の貨物用の大きくないパンを手に入れま
した。車は中古でして、約1800ドル
しました。

今年の第1四半期(2,3月)には、
131人を受け入れました。療養が必要
な病弱な子どもを選んでいきます。

宿舎、スポーツ施設借り上げ費用、食
事の費用も急激に上がっています。2
年前に比べると、子ども一人当たりの経
費は2倍になっています。これは国の経
済状態の悪化によるものです。労組にお
金がないため、4月の経費は全部こちら
で(九州のカンパで)みることになり
ました。でも心配しないでください。私
たちは皆さんの支援と援助とを高く評価
しています。

作業ボランティアの登録を！

通信や本の発送作業をしていただく
作業のボランティアを大募集していま
す。通信は数日で3000通近くを送
らなくてはならないので、たいへんで
す。また今年は作文集の出版もあり、
人手が多くいます。もうすでに10
人近くの人にボランティアとして登録
していただいています。作業の時、
必要な人数の方に来ていただくため
には、もっと多くの方の登録が必要で
す。都合のよい時間だけで結構です。
交通費の実費を支給します。作業の内
容は、どなたでもできる簡単なもの
です。

作業の時間

月、火、木、金曜日 10時半～16時
水曜日 13時～16時

※土、日はお休みですが、忙しい時
は開けています。

※上記外でも、可能な時間があります。

申し込みは、名前、連絡先、都合の良
い時間・曜日(だいたい結構です)
を明記の上、電話、ファックス、葉書
で事務局まで。後日連絡させていただきます。
今は、4月26日から6月
8日からの原画展の会場の受付を急募
しています。少しの時間でも結構です。
時間のあく方は連絡してください。

いよいよ発売

チェルノブイリの子どもたちの作文集 わたしたちの涙で雪だるまが溶けた ～子どもたちのチェルノブイリ～

皆さんにお知らせしてから、お問い合わせも多くいただきました子どもたちの作文集が5月にはお手元に届けることができる運びとなりました。支援運動・九州の今年最大の大事な仕事です。編集段階からすでに新聞各社や月刊宝石などから大きく取り上げられています。5月発売のカタログハウスの「通販生活」でも特集されます。また、NHK短波放送でも英語、ロシア語、日本語で紹介され、各国から反響が寄せられました。

この話題の本について、出版に先駆けて会員の皆さんにくわしく紹介します。

▼題

わたしたちの涙で雪だるまが溶けた
～子どもたちのチェルノブイリ～

▼定価 1300円

▼チェルノブイリ支援運動・九州 編

▼発行 梓書房（書店注文の場合）

▼表紙絵 葉祥明さん

装幀 毛利一枝さん

▼内容

・作文について

第1章 突然の雨…

第2章 ゾーン、埋められた村

第3章 これもため、あれもため

第4章 わたしは生きる

第5章 時限爆弾

第6章 森よ、河よ、草原よ…

・挿し絵として現地の子どもたちの描いた絵を掲載。

・支援運動・九州の調査団が写した被災地やサナトリウム九州の写真をカラーで8ページ掲載。

▼解説 松下竜一さん。

▼その他

支援運動・九州より

全国のチェルノブイリ支援NGO紹介コーナー、出版協力者の一覧など。

※小学校高学年以上の子どもが読める程度のルビをふっています。

前号の通信で、表紙・挿し絵は「超有名絵本作家から申し出があった」と書きましたら、「いったい誰ですか」という問い合わせが相次ぎました。正解は葉祥明さんです。葉祥明さんというと、絵本、便箋、ハガキ、切手等のさわやかな絵を思い浮べる人も多いと思いますが実は、「ぼくのあおいほし」という原発事故を扱った絵本も描いて

います。装幀の毛利さんは、福岡在住の装幀家で、アエラの現代の肖像でも取り上げられた方です。お二方のおかげで、本の顔は、非常にセンスのあるすばらしいものとなりました。

掲載する作文は、150人近くのアンケートにより100編の中から50編に絞ったものです。事故直後の状況、人々の混乱、家族や親戚、故郷を失った悲しみが胸をうちます。編集をしながら私たちも幾度も涙しました。また、事故隠しや事故処理のことなど、資料としても興味深く、貴重なものです。

翻訳は、支援運動・九州の顧問の菊川憲司さんを中心に、東京外国語大学の和田あき子先生をはじめ、学生・大学院生の方々にも協力をしていただきました。また、直訳文をより読みやすい文にするため、文章のプロ・アマあわせて15名の方々が協力をしてくださっています。

この本は、チェルノブイリのことを多くの人に伝えたい、よい本を創りたいというたくさんの人の思いの結集です。その事も感じ取っていただける本になっていたら幸いです。

お読みになって、ぜひ感想を聞かせてください。

注文方法

■支援運動・九州の窓口で受け付けています。今回振込み用紙を同封していますので、それで注文できます。

5冊以下の場合、送料は実費となります。

- 書店でも購入できます。書店扱いができるよう、本のコードNo.を取りました。少ない数の注文の場合、送料を支払わなくてよいので個人負担は少なくなります。その場合出版社名を「梓書房」としてください。
- グリーンコープ生協でも取り扱います。(いつになるかは未定です)
- 全国12カ所のチェルノブイリ支援NGOでも取り扱っています。(一覧表参照)

すでに予約された方へ
その後書店扱いができるようになりましたので、上記を参考にしてお自分の都合のよい方法をご検討ください。

販売協力のお願ひ

この本をたくさんの人にお薦めいただくために、販売価格を決めました。(資料参照)たくさん注文して頂ければ送料もただ、価格も割安ということで、それを定価で売れば一冊につき最高325円が入ることになります。市民運動グループその他団体の資金集めとしてもご利用いただけるのではないかと考えております。

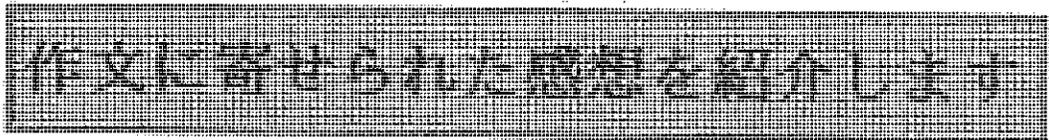
その場合、当支援運動への払込みは、本発送の際に同封する振込用紙で振込んでください。また、同封チラシ、新

聞記事、NHKラジオのダビングなど販売促進グッズも用意しておりますので、遠慮なく連絡ください。

■ ベストセラーにしよう!

アイデアまっています

この作文集の収益は、チェルノブイリ原発事故の被害を受けた子どもたちのために使われます。いくつかの出版社から「うちで出さないか」という声がかかったのですが、より多くの収益のため（自費出版だと紙代・印刷代などを含めた必要経費だけでできます）と、多くの人の思いを生かした本を創るため、やはり自費出版にしてがんばって売っていこうということになりました。



新聞の「作文集の編集を手伝って」の記事を読んで、たくさんの方々にアンケートの協力をさせていただきました。アンケートの回答と一緒に感想もたくさん添えられていました。また、東京の保善高校からは、ひとクラス全員の感想が寄せられました。ほんの一部ですが、ここに紹介します。

●チェルノブイリ支援運動の方々へ

井元 亜矢子（中2）

初版は自費出版としては「エッ」と驚く、1万部です。「この本は売れる」との各方面からの声に励まされ（乗せられて）踏み切りました。しかし、本が仕上がるにつれて、「この本は絶対いい」という確信が深まり、代表のFさんの口からすでに増刷の話も出ています。実際、この内容ですと、ある程度知れ渡ってくると加速がついて売れてくるのではないかと考えています。そこで、同封の用紙のように、販売のためのアイデアを募集しています。こんな所に案内を送っては？とか、ここに置いてもらっては？など教えてください。また、アイデアを即行動に移してくださるとなご歓迎です。その場合、他の人とだぶる可能性もありますので、事務局にご一報ください。

ごくろうさます。この間、作文を読ませていただきました。

私は、チェルノブイリや原子力や原爆の事には興味がありませんでした。けれど、戦争のTVを見ていて、ヒロシマに原爆が落とされたりしているのを見て、母が、「あれは大変なのよ。」と、長々説明してくれました。もともと母が原子力には反対の考えを持っていて色々知っていましたから、チェルノブイリの事も知っていました。その時色々聞いて、これは知っとかなきゃ

など思い、図書館で調べたりもひまな時やっていました。

そんな資料を見ていくうちに、もう一生おこしてはいけないなと思いました。そんな事も忘れかけた時に学校の地理でチェルノブイリの事を勉強しました。その時です、新聞にちょうどのもっていたのは。私は気づかなかったのですが、母が気づいて、Telしてみたら、なんて言われて、いざ資料がくると何目も読めませんでした。書いてある事が本当か、これが地球の中でおきた事なのか、頭がボーッとして。他のことを考えたくくなりました。

次の日、友達と地理の話をしてチェルノブイリの事になりました。友達の考えはあまかったです。でもきっと同じ話をしたとして、あまい考えの人は、10人中10人だと思えます。この考えを直すのにも、同学年くらいの人で事故にあった人の声は、何よりも貴重だと思えます。他のダレが話すよりも。だから、本をぶじに出版して下さい。あってみなきや分からない。それではもうおそいのですから。

自分の物は自分の物
地球の物は地球の物
せまい地球。

地球と仲良くやっていきたい。

●チェルノブイリという言葉の重さ

澤田 美紀 (中3)

寒い毎日が続き、また先目の地震の被害に心が痛んでおります。(お会い

したことはありませんが) スタッフの皆様はお元気ですか。

ところで、先目はたくさんの作文の束を送って頂きありがとうございました。家に届いてから1週間かかってやっと読み終える事が出来ました。どの文章からもチェルノブイリという言葉の重さを感じ、このような運命を背負ってしまった友達を思い、読みながら何度も泣いてしまいました。

わたしはこの1週間で3つの悲劇を経験しました。・・・実際に自分がなったのではないので経験とは言わないかもしれませんが。1つは神戸での地震、2つ目は(あまり関係ないですが)「レ・ミゼラブル」を読んだ事、3つ目はこの作文を読んだ事です。そして”運命”というものを考え続け、今も頭の中はチルノブイリに飛んでいて、今わたしがいる所が現実なのか夢なのか、何が現実で何が夢なのか、考えれば考える程何が何だか分からない状態になっています。

”チェルノブイリの事故”・・・それは私にとっては”歴史の授業で学んだ知識”でした。ですから、その”事故”が原因となり、人生を傷つけられてしまった多くの会ったことのない友人達がいるなんて考えた事はありませんでした。明るい未来しか考えていませんでした。

ところが何と言う事でしょう!この世界には本当に本当にたくさんの苦しんでいる子供がいたのです。チェルノブイリだけではないのですね。アフリ

カではお腹をすかせている子がいます。チェチェン共和国は今どうなっているのでしょうか！それから、それから・・・！

この作文を読んだ今までただの”知識”だけだった様々な事を考える様になりました。でもなかなか現実の事とは思えません。ただ、1つだけ確かなのは、私は本当に幸せな所に居るのだということです。そして、苦しんでいる友人達に出来る限りの事をしてあげなくてはいけないのではないかと、ということです。

わたしはこの作文を読む事が出来た事を本当に感謝しています。本当にどうもありがとうございました。そして、ほんの少しではありますが、お年玉の残りを寄付させて頂きたいと思います。

わたし達はいわゆる”21世紀を担う世代”です。今世界中にはたくさん問題があります。日本の中でも高齢化が進んで税金などの問題があるし、水、空気、ゴミ、オゾン層、核、教育、貿易・・・考えるときりがありません。こんな世の中を生きて行くためにはやはりみんなで協力していかないといけないでしょう。協力する→仲良くなる→友達になる→お互いを知り合う・・・協力するためにはどうしたらよいか考えていくとこういう結果になりました。

わたしは現実から逃げないでいたいと思います。わたしには今、1つ将来の地球を考える為の道が開けました。それはチェルノブイリのことをもっと

よく知り、そういう事をきっかけとして世の中の問題をもっと広く、深く、真剣に考えていく、ということです。

わたしはこれから、毎日の生活に追われてばかりいないで、こういう勉強もしていきたいと思います。

わたしはこの作文集を学校の休み時間でも読んでいたので友達も興味を持ってくれ、今、みんなで作文集を回し読みしています。1人でも多くの友達がこういった世の中の問題を考えてくれるようになれば必ずよい世の中になる、と思います。

では、この地球がよりよくなること、チェルノブイリの友達にいつか会えること、素敵（・・・？・・・現実味のある？・・・感動を呼ぶ？・・・よい言葉が見つかりませんがよりよい）本が出版されることをお祈りいたします。

寒い時期ですのでかぜなどひきませんようお気を付け下さい。またなにか出来ることがありましたら、是非やらせて頂けたらうれしいと思っております。

●この事実を忘れない

山崎 真路（高1）

僕は全作品を読み終えてとてもいたたまれなくなりました。そして、ふつふつと燃えさかる怒りをどこにぶつければよいのかわかりません。ある少女は髪がぬけおち、ある家族はとても不幸な人生を歩むことになり、そしてあ

る少年は”このことをわすれては絶対にいけない”と、つぶっています。僕にはなにができるというのでしょうか。無力感が僕をおそいます。同年代の子ども達が同じ星の、同じ北半球の、すぐとなりの国で苦しんでいるのに、なにもできないとは情けないことです。だからせめて、僕は胸の中にこの事実をとどめて二度と忘れないようにつとめていきたいとおもいます。

●彼らの苦しみは地球の苦しみ

白井 義輝 (高1)

「核時代に生きる」—そのこの意味を、僕たちは何度でも考えなくてはならない。ポスト冷戦の時代を迎え、核戦争の可能性が減少したのは事実だが、未だに核の脅威は衰えない。世界は核を抑止力とする冷戦思考から脱却できていないのだ。チェルノブイリの不幸で気落ちしているベラルーシの人に希望を与え、共に戦わなければならないはずの僕たちは、原子力開発という名において核拡散を進めている。深刻なエネルギー不足により、ウクライナはチェルノブイリ原発のうち利用可能な原子炉の使用を再開した。ベラルーシの病床からの痛切な訴えに耳を傾けなくてはならない。彼らは休む暇もなく、叫び続けているのだ。力にならなければならない。彼らの苦しみは地球の苦しみ、僕たち一人一人苦しみである。これは現実であり、今、この瞬

間のことなのだ。作文に「私たちの地球を守るのを手伝って下さい」という言葉があった。他の地球人は何をしているのか。僕たちはどこまで無神経なのか。僕と同じ年代の人が耐えている。見えない敵に勝つために、力をふりしぼって。僕も立とう。核廃絶に向かって、地球の未来に向かって、僕たちにはやるべきことがある。核の危険性に警鐘を鳴らして、鳴らしすぎるということはない。

●今、世界がひとつになって

小野 澤浩 (高1)

この事故は単なる爆発事故ではなく、世界的大事故というべきではないかこの文を読んでそう思った。この子たちの体験したことは、今、世界がひとつになって考えなければならないことだと思ったし、この子たちの精神的ダメージはとても大きかったと思った。この文はこの子たちの心の中の想いだと思うし、この子達の叫びをしっかりと聞くべきだと思った。この文を通じて、私たちが生きていく中でとても大切なことがこの文の中に書かれているような気がした。歴史にも残るこの大事故に対するチェルノブイリの人たちの叫びや憎しみがあふれてくるようで、とてもやりきれない気持ちになる。これからは、このような事故をふせがなければならないということを、この文を通じて学ばされたような気がした。

作文を書いた子どもの来日について

6月4日から15日の予定で、作文を書いた子どもたちが来日します。

来日する子どもたちは

- ◆リュドミラ・チュプチクさん、81年3月1日生まれ、「わたしは生きる」の作者
- ◆ビクトル・ブイソフさん、79年12月16日生まれ、「苔 ああ 苔」の作者
- ◆エレナ・クラジェンコさん（未定）「ゾーリカ・ベネーラの歌」の作者
- ◆ポノマリヨフ・オレグくん、82年7月3日生まれ、「最後の授業のベル」の作者
- ◆ワシーリ・ヤコベンコさん、チェルノブイリ同盟の代表となっています。

予定では、東京、鎌倉、熊本、大分、北九州、福岡を訪問し、各地で開かれている作文集の原画展に顔を出し、交流のひとつときを持ちます。

すでに東京では日程が決まっています。6月5日（月）午後6時、文京シビックセンター区民会議室4Fホールで交流会を行うことにしています。詳しい内容はこれからですが、東京近辺の方はぜひご参加下さい。

※ 詳しくは、東京事務局員、河上まで（TEL 3411・0108）

チェルノブイリ原発事故から9年 「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた ～子どもたちのチェルノブイリ～」 原画展開催について

本の出版のPRも兼ねて、チェルノブイリ原発事故からちょうど9年にあたる4月26日から原画展を行ないます。

日時 4月26日（水）～30日（土）
午前9時30分～午後7時
場所 レインボープラザ一階ロビー
（北九州市八幡東区中央町）

入場無料
内容

- ①ベラルーシの子どもたちの描いたチェルノブイリ原発事故にまつわる絵。
- ②ボランティアで描いてくださった葉祥明さんの表紙、扉絵の原画。
- ③支援運動・九州の現地調査団が写した写真のパネル。

※6月8～13日には、子どもたちの来日に合わせて北九州の黒崎井筒屋ブックセンターでも計画しています。日時は他の会場との兼ね合いですので、前後する可能性があります。

原画展を

あなたの街でもしませんか？

この原画展は、全国で開催したいと思っています。原画の貸し出し料は無料ですので、みなさんもお気軽に取り組んでみませんか。本屋さんなどは、結構好意的に話に乗ってくださいます。大きい会場にこだわらず、本を置かせてくれるような喫茶店、自然食品店、レストランなどでも考えられます。

また、葉祥明さんのご好意により、原発事故を扱った絵本「ぼくのあおいほし」の原画も無料で貸していただけることになっています。くわしいことや、やり方などは、事務局までご相談ください。

新しい事務局員紹介

なんと、なんとわか〜い男の子たちが立て続けに3人も事務局に入りました。事務局最年長おねえさまのTさんのご機嫌が最近良いとうわさです。おかげさまで、いままでの事務局の平均年齢36歳が33歳になりました。市民運動の高齢化現象がささやかれる中、このチェルノブイリ支援運動・九州の勢いはたいしたものですよ。

入った順に自己紹介をしていただきました

◎ 内海さん

はじめまして。内海和久と申します。この度、事務局スタッフとしてお世話になることになりました。

「戦争と平和」の題材ともなった、ロシア軍とフランス軍の戦い、その中でも1812年冬の戦いを描いた本を手にしたのが、物語の舞台として広大な土地や雪の世界といったイメージで、旧ソ連邦に興味を持ったきっかけでした。依頼今日まで、彼の国に対する気持ちも冷めることなく、何度か出かけています。これも、現地に友達が出来たことをはじめとして、行く度に新しい発見や何らかの人たちとの出会いに恵まれたから、といてもいいでしょう。

最初の頃は、モスクワの空港や店での対応ぶりに、腹を立てていましたが、だんだんとあの国の人たちのやり方にも慣れてきました。

ともかく今は混乱しています。しかし、それでも野球に打ち込んで頑張っている青少年たちがいます。そしてスポーツを通じて彼らに立派に成長して欲しいと願う大人たちも居ます。そこに私は感動して交流を始めました。私も、子どもたちの成長に少しでも役に立てばと思っています。野球道具では、日本の子どもたちのように恵まれていませんが、元気と明るさは負けないものを持っています。彼らの中から、日本のプロ野球界で活躍してくれる選手が誕生すること。私の希望です。

でも、今からはもう一つ希望を加え

ましょう。それは、ベラルーシの手もたちが早く健康を回復して、私と一緒にキャッチボールをしてくれること、そしてみんなでチームを創って、空気の美味しい広々したところで野球を楽しみたい！。……あとはロシア語を！と思うのですが、こちらはどうもさっぱりです。

という訳で、微力ですがよろしくお願ひします。

◎ 大友泰樹さん

はじめまして、大友泰樹と申します。僕の父が(有)有機コーヒーの中村さんと知り合いで照会してもらい去年の12月に東京の立川市という所から福岡のほうへ来ました。それまではフリーターをしていたのですが、コーヒーに興味が出てきて、親父がすすめてくれたこともあり、有機コーヒーで働かせてもらうことになりました。コーヒーの勉強をする事が目的だったのですが、他にも勉強になることがあればと思い、いろいろな所へ連れていってもらい、中村さんが事務局員をしている支援運動・九州事務局にも何度か顔を出していました。そしてこの度正式に事務局員になった次第です。こういうことは初めてなので、何をしたら良いのかわかりませんが、みなさんのお手伝いをさせてもらいながらいろいろ学んでいきたいと思っています。

これからよろしくお願ひします。

◎ 矢野宏和さん

今回から事務局でお手伝いをさせていただくことになった矢野宏和です。在学中にブラジルで偶然、チェルノブイリ支援コーヒーをやっている中村社長と出会い、有機農業に興味を抱き、4月から(有)有機コーヒーで働いています。今後も“土に根ざした生き方”をテーマに活動していきたいと考えています。どうぞ、よろしくお願ひします。

ちなみに年齢は、上から順番に32歳、20歳、24歳となっています。今後の活躍をご期待下さい。



夕日

枯れ木だけになった大地に日が沈む